

世界のお話

6

こども図書館

花岡大学



まっ赤なぼうし



童話

民話

神話



世界のお話 6 こども図書館

まっ赤なぼうし

昭和四十三年十二月二十五日印刷
昭和四十四年一月一日発行

定価 四五〇円

著者―花岡大学

発行者―横山実

印刷者―上田庄之助

発行所―大阪教育図書株式会社

東京都千代田区神田錦町三の一七

大阪市東住吉区田辺西之町六の四

郵便番号東京―一〇一 大阪―五四六

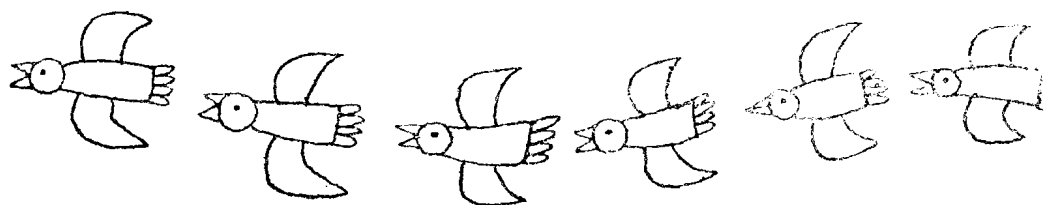
©1969・花岡大学・上田印刷・堀越製本
落丁本・乱丁本はお取り替えます

さるのてぶくろ

花岡大学



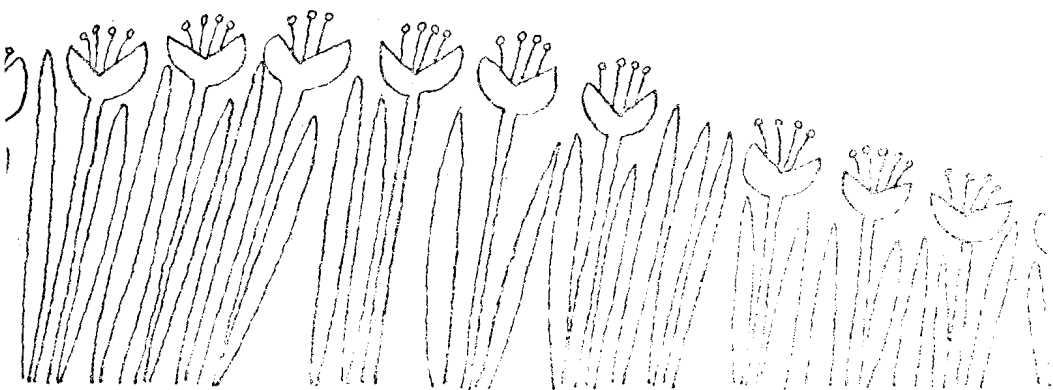
大阪教育図書



は じ め に

この本は、名高い世界の童話、民話、神話のなから、もっともすぐれたお話を、いくつかつえらびだしてつくったものです。

そのいずれもが、きっと、みなさん方の心をとらえてはならないでしょう。こどものころに、そういう経験をもつということが、人間を形づくる上に、とても大切なことなのです。読んであと、おかあさんといっしょに、いろいろと話してってください。



はじめに

● 童話 ●

不思議なすき 九

鏡 二六

てんぐの鼻くらべ 三二

牛の目の中 三〇

＊ 民話 ＊

わがまま王子 三七

人間の皮 四九



まっ赤なぼうし 五三

小人のやくそく 六三

◇ 神話 ◇

天のおつかい 七二

三つの星 八四

ヴァイオリンひきのロビン 九二

海の魚 一〇三

* *

お話の解説 一九



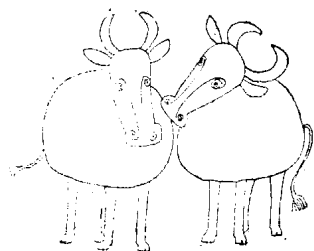


■ 装
幀

尼 谷 義 雄

■ さ
し え

大 古 尅 己
竹 昌 夫



童話



不思議なすき

ある村のはずれに、石の十字架が立っていました。

一人のお百姓さんが、畑へ仕事にいかうと思つて、その前を通りかかりました。

そこを通るときにお百姓さんは、いつもひざまづいて、おいのりをするにしています。

今もおいのりをすませて、ふと気がつきますと、石の十字架の上に、今までみたことも、き

いたこともないような、きれいな一匹のかぶと虫がいます。

その虫は、じつとみていますと、上へいたり、下へいたりして、なんとかして、石の十

字架からはなれようと、もがいているふうにみえました。

お百姓さんは、

「どうしたんだろう？」

不思議なすき

と、思いましたが、しかし、その日はあまり気にもしないで、そのままどおりすぎました。あくる日になって、また十字架の前まできますと、きのうのかぶと虫が、やっぱり石の十字架の上について、上ったり、下ったりして、どうやら一生けんめいに、そこからはなれようと、もがいているようなようです。

お百姓さんは、首をかしげて、かんがえました。

「土の中にすんでいる小人は、なにか、たいそうとおどいものにふれると、たちまち、身体がくつついてしまって、はなれることができないと、きいたことがあるが、このかぶと虫は、小人なのかもしれないな？ そうだと、かわいそうだが……さて、もう一日、ようすをみた上で、あすもまだここにいるようだったら、たすけてあげることになしよう。なんととっても、とおと十字架のことだから、みだりに手をだしたりしてはいけないもの……。」

それで、その日も、お百姓さんは、かぶと虫をそのままにして、通りすぎました。

そのつぎの日になって、十字架の前まできますと、やっぱりかぶと虫は、上ったり下ったりしています。

「かわいそうに、すがたはかわっているが、どうやら小人らしい。三日間も、石の十字架に

くつついてはなれずに、さぞ、くるしかつたことだろう。よしよし、それじゃ、さつそくわしから、神さまにおわびをして、おゆるしをねがってあげよう。」

心のやさしいお百姓さんは、頭をたれて、ながいあいだ、かぶと虫のために、おいのりを
してあげました。

そして、片手でかぶと虫を、つまみました。かぶと虫は、ばたばたもがいていましたが、まもなく無事に十字架からはなれることができました。

「そうら、とうとう神さまが、おゆるしくだすつたのだよ。さあ、お前もいっしょにお礼をしよう。」

お百姓さんは、そういつて、かぶと虫を草の上におくと、もう一度、十字架にむかつて、
ていねいにお礼を申しました。

そして、ふとみると、草の上においたかぶと虫が、みるみるうちに、小さな黒い色の、小人
にかわっていききました。

そして小人も、お百姓さんとおなじように、手をあわせて、十字架をおがみながら、
「もう二度と、とおどいものにふれぬよう気をつけます。おゆるしくだすつてありがとうこ

さいました。」

と、いつて、あやまっています。

お礼をすませた、お百姓さんは、小人にむかつて、

「まあ、よかった。よかった。おうちでは、三日もかえらないので、みんな心配しているにちがいない。さあ、早くかえるのだよ。そして、もうふたたび、あんなことのないように、よく気をつけるのだよ。」

と、いつて立ち上り、畑の方へかけていこうとしました。

すると小人は、お百姓さんを、あわてて、よびとめました。

「お百姓さん、あなたのやさしいお心によつて、あぶない命もたすかり、神さまから、ゆるしていただくこともできました。なにか、お礼をさしあげたいと思います。どうかひとつ、あなたのほしものを おっしゃってくださいませんか。」

「なんだって、お礼などしてもらおうと思つて、たすけてあげたのではないよ。なんにもいらないよ。」

「いいえ、それでは、私の気がすみません。ぜひ、なにか、さしあげたいのです。どうか、え

んりよなさらずに、おっしゃってください。」

お百姓ひやくしやうさんは、こまつたという顔かおつきをして、しばらく、かんがえていましたが、やがて、
「そんなにいつて、くださるなら、えんりよなしにいうが、わしは、おみかけどおりの百姓ひやくしやう
なので、ほかのものは、なんにもいらんが、百姓ひやくしやうどうぐがほしいと、つねづねおもっている
のだね。」

「どんな、道具どうぐですか？」

「すききかほしいな。畑はたけをすくすき、もうながい間使あいだつかつているので、今いまもっているやつは、す
っかりちびて、だめになつてゐるから。」

「しょうちしました。金きんのすききを、さしあげましょうか？」

「めつそうな、そんなぜいたくなものは、ごめんだ。そんなぜいたくなものは、人間にんげんの心こころをく
さらすばかりだ。」

「じゃ、銀ぎんのすき？」

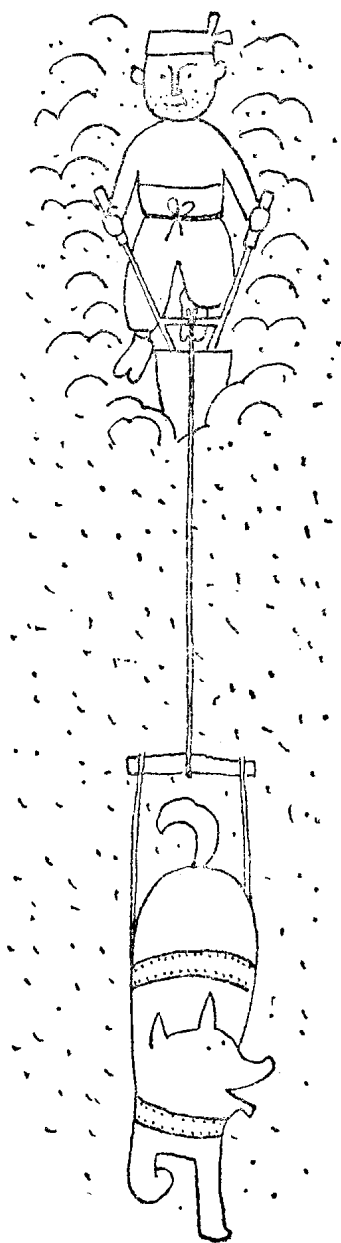
「いやいや、わしのほしいのは、鉄てつのすききでいい、ただのすきでいいよ。」
なんてよくのない、美うつくしい心こころのお百姓ひやくしやうさんだろう。

小人は、すっかり感心したように、小さな頭をふりながら、ことばをつづけました。

「わかりました。それじゃ、あすあさまでに、お百姓さんのおうちの前まで、もっていっておきます。ただの鉄のすきですが、そのすきは、どんな小さな馬でも、犬でも、にわとりでも、だれでもたやすく、ひっぱることができて、しかも、いくらひっぱっても、つかれることがないようなすきに、こしらえておきます。」

そういうなり、小人のすがたは、ふきけたように、ふうつと、どっかへ消えさつていきました。

あくる朝になりました。



お百姓ひやくしやうさんが、家の前いえまえにててみますと、きのうの小人こびとどのやくそくどおり、新らしい鉄てつのすきが、ちゃんと庭先にわさきに、とどけられていました。

お百姓ひやくしやうさんは、たいそうよろこんで、さっそく犬いぬをつれて畑はたけにゆき、犬いぬがすきをひっぱって、畑はたけがすけるかどうか、ためしてみました。

小人こびとのいったとおりでした。

うまくすけます。

毎年まいねん毎年まいねん、大きな牛うしや馬うまの力ちからで、ずいぶんくろうして、すいていたところも 犬いぬがやすやすとひっぱって、すいてくれます。

どんなにかたい土つちくれも、わけなく、すきかえされます。

しかも、犬いぬは、ちつともつかれたようすなどありません。

ほんとに仕事しごとがらくに、ほんとんはかどつていきました。

それで、心のやさしいお百姓ひやくしやうさんは、そののち、小人こびとからもらった、ふしぎなすきのおかげで、たいへんお金持かねもちになり、とてもしあわせに、くらしすことができたということです。